極私的日常生活行動地図

朝倉かすみ

十六になる年の春まで小樽で暮らしていた。

それから住むところを次々変えて、今は朝霞というまちにいる。

一年ごとに歳をとり、去年六十になった。

どこに住んでも、いくつになっても、わたしの日常の行動範囲はほとんど変わらない。

それは徒歩で往復できる範囲だ。あるいは循環線で往復できる範囲。お昼過ぎに家を出て、夕ごはんの時間までに帰ってこられる範囲であり、普段着のまま行ったりきたりできる範囲である。

これよりほかの移動手段で出かけると、旅立つ、という気分になる。ちょっと珍しいことをしているような、今日はどこそこに行きました、と、手帳に書きつけたくなるような、そんなふうだ。思い出すときは、アルバムをひらくような手つきになる。布張りの分厚いやつで、ふとした瞬間を収めたピンぼけの写真が並んでいる。

わたしは住むところを次々変え、あちらこちらで日常生活を送った。その日常生活を、わたしは、引っ越すたびに忘れていった。住んでいた場所は覚えているのだが、そこでわたしが毎日どうしていたのかが、上手に思い出せない。ビュンビュン走る電車の窓の眺めのようだ。実にまー、ビュン！　ときれいさっぱり飛びすさっていくのだった。

それでもいっこうに構わないと思うのは、代わり映えしない毎日を送っているからだろう。どこに住んでも、いくつになっても、わたしの日常の行動範囲はほとんど変わらない。それは徒歩で往復できる範囲であり、循環線で往復できる範囲で、わたしのなかで、しぜんと地図ができる。極私的日常生活行動地図だ。

そう、極私的日常生活行動地図。居を移すたびに消失するのだが、小樽での地図はどうしたって消えない。

その地図は、わたしの心のなかにある。蟻の巣のようなかたちをしている。わたしの心がまだふかふかと柔らかな土だった頃に作られたたくさんの小部屋が細いトンネルでつながっている。

たとえば、小部屋のひとつに灯りをともすと、学校帰りの三叉路の大きなネコヤナギの前で「決めた。あたし、もしフランス人になれたらエリザベートって名前にする」と友達に宣言した場面がくっきりと浮き上がる。ダンゴ山の原っぱで見つけた、恐ろしくよく跳ねる銀色のバッタのこと、大門湯に貼ってあった映画のポスターで覚えた「新宿（ジュク）の女番長（スケバン）」という文句が気に入り、ノートの氏名欄に「ジュクのスケバンかすみ」と書いたことなどが次から次へと浮き上がり、ただいま、というきもちになる。

朝倉かすみ

1960年8月10日、小樽市生まれ。小樽市立東山中学校卒業。高校・短大時代は石狩市で過ごす。卒業後はさまざまな職業を経験する。30歳のとき小説を書き始め31歳から創作教室に通い、43歳で作家デビューした。

2003年、「コマドリさんのこと」で第37回北海道新聞文学賞受賞。2004年、「肝、焼ける」で第72回小説現代新人賞受賞。2009年、「田村はまだか」で第30回吉川英治文学新人賞受賞。2017年、『満潮』で第30回山本周五郎賞候補。2019年、『平場の月』で第32回山本周五郎賞受賞、第161回直木賞候補、第4回北海道ゆかりの本大賞受賞。

おもな著書

肝、焼ける（2005年11月講談社）
ほかに誰がいる（2006年9月幻冬舎）
そんなはずない（2007年6月角川書店）
好かれようとしない（2007年11月講談社）
田村はまだか（2008年2月光文社）
タイム屋文庫（2008年5月マガジンハウス）
夫婦一年生（2008年8月小学館）
エンジョイしなけりゃ意味ないね（2008年11月幻冬舎）
ロコモーション（2009年1月光文社）
玩具の言い分（2009年5月祥伝社）
静かにしなさい、でないと（2009年9月集英社）
ともしびマーケット（2009年7月講談社）
深夜零時に鐘が鳴る（2009年11月マガジンハウス）
感応連鎖（2010年2月講談社）
声出していこう（2010年8月光文社）
夏目家順路（2010年10月文藝春秋）
とうへんぼくで、ばかったれ（2012年5月新潮社）
幸福な日々があります（2012年8月集英社）
少しだけ、おともだち（2012年10月筑摩書房）
てらさふ（2014年2月文藝春秋）
遊佐家の四週間（2014年7月祥伝社）
地図とスイッチ（2014年11月実業之日本社）
乙女の家（2015年2月新潮社）
わたしたちはその赤ん坊を応援することにした（2015年2月幻冬舎）
植物たち（2015年12月徳間書店）
たそがれどきに見つけたもの（2016年2月講談社）
少女奇譚　あたしたちは無敵（2016年6月KADOKAWA／角川書店）
満潮（2016年12月光文社）
ぼくは朝日（2018年11月潮出版社）
平場の月（2018年12月光文社）
にぎやかな落日（2021年4月光文社）

小樽市青少年科学技術館（1970年頃）

野球帽をかぶり直し、朝日はバス通りの向かい側に目をやった。科学館がある。銀色のドーム型の屋根が日光を受け、ロボット的な――金属的な――きらめきを放っていた。

朝日はたて笛の吹き口を唇にあてた。「朝」を吹き始める。「ペール・ギュント」第一組曲第一曲「朝」だ。耳で覚えた旋律をなぞっただけのものではあるが、「ペール・ギュント」第一組曲第一曲「朝」。

科学館にあるプラネタリウムで流れる曲だった。（朝倉かすみ『ぼくは朝日』より）

市立小樽文学館
〒047－0031　小樽市色内1－9－5
（日本銀行旧小樽支店金融資料館向かい）
tel.fax.0134-32-2388

開館時間　9時30分～17時（入館は16時30分まで）

料　　金　一般300円 高校生および市内高齢者150円
中学生以下無料